第２１４回　「元気に百歳」クラブ「道草」新句会３回目開催

店頭に並んでいる今年の栗は、形が小さいように思われてなりません。これは栗の成長には適当ではない天候だったということ、つまりは、必要な日照時間に恵まれなかったということでしょう。「コロナ禍以来、天候まで悪い」なんていうと、コロナ禍が、怒ってくるかも知れませんが、世界の天候が狂ってきているように思いますし、それが人類の我がままに着火したのか、これまで人類が積み上げてきた社会機構を崩壊の方向に向けているように思うのです。私たちには見守ることしかできませんが、こういう時こそ芸術の果たす役割は、重要なのではないでしょうか。そして、俳句もその一役を担っているのかも知れません。

さて、私たちの俳句のことです。１０月は「新橋ばるーん」で、リアル句会を開催することが出来ました。句会には参加しないで、投句から選句までを送信して参加された８名の方を含めて総勢１７名が参加しての句会となりました。目を傷めて暫くお休みをしていました君塚明峰さんが、元気に出席をなさいましたのは、嬉しいことでした。以下、参加された方は次の通りです。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、
手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、舩戸清助さん、本間傘吉さん、
森田多佳さん、芦尾白然（１７名）。

皆さんが詠まれた句の中から、優れた句として選ばれた今月の優秀句を、下述致しますのでご高覧下さい。今回から天賞マークと最多得票賞を知らせる☆印とは別に、優秀句に投じられた票数を、月のマーク「☾」でお知らせすることにしました。併せてご高覧下さい。

兼題１「行く秋」
◎『夜の海の青き鋼や秋の果』　荻女　　天２☾４
◎『行く秋や比叡の影濃き鳰の海』　清助　　天１☆７
◎『行く秋に色あやなすや野も山も』　傘吉　　天１☆７
◎『テラス席選んでランチ秋惜しむ』　和感　　天１☾５
◎『生くる日を数ふる友のゆく秋よ』　多佳　　天１☾３
◎『行く秋や声なき里に降る小雨』　白然　　天１☾２
◎『行く秋やわが人生を振り返り』　創風　　天１☾１

兼題２「鶏頭」
◎『縁側に爪切る日和。鶏頭花』　晶如　　天１☆９
◎『別珍といふ布ありき鶏頭花』　多佳　　天１☾３

兼題３「当季雑詠＝秋＝」
◎『秋刀魚焼く忍者づらした猫ひかえ』　栄女　　天２☆８
◎『新走り愚痴も笑顔で聞き流す』　傘吉　　天２☾５
◎『切れ味の悪しき包丁秋の雨』　多佳　　天１☾４

兼題１では、荻女さんの句「夜の海の青き鋼や秋の果」が、天賞二つを獲得しました。晩秋の夜の海を詠んだ句ですが、これを「青き鋼」と表現されました。何ものにも動じない海の冷厳さ、強靭さとして捉えたのでしょう。読者はその表現に一票を投じられました。

次に清助さんの句「行く秋や比叡の影濃き鳰の海」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。下五の「鳰の海」とは琵琶湖のこと、晩秋の比叡連山が琵琶湖に写し出されている景を、中七で「影濃き」と表現されました。スケールの大きな句です。読者はそのスケールの大きさに一票を投じたのでしょう。
　次に傘吉さんの句「行く秋に色あやなすや野も山も」も、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句の景も、中七に「色あやなす」と表現されているように、晩秋の野山を彩る紅葉の光景を切り取りました。いつ迄も止(とど)まって居て欲しいと願ってみても、止(とど)まってくれないのが自然界の掟、寂しさは募るばかりです。次に和感さんの句「テラス席選んでランチ秋惜しむ」が、天賞一つを獲得しました。例えば日比谷公園や神宮外苑に見るレストランのテラス席での光景です。ランチをテラス席でしようと、惜しむ秋に相応しい一角を選びました。さぞかし素晴らしいランチになったことでしょう。
　次に多佳さんの句「生くる日を数ふる友のゆく秋よ」が、天賞一つを獲得しました。友が指を折って余命を勘定しているような切ないシーンです。「何を弱気なことを・・・」と、友を励ましても、どこかで「そうかも知れない」と、肯定している己もいます。身にしむ寂しい秋ですね。次に白然の句「行く秋や声なき里に降る小雨」が、天賞一つをいただきました。秋の寂しさに一票を投じていただけたのでしょう。次に創風さんの句「行く秋やわが人生を振り返り」が、天賞一つを獲得しました。去り行く秋の寂しさの中で、わが人生の来し方を振り返られたのでしょう。万感胸に迫ってくるものが多々あったと思われます。一票を投じられた読者は、その懐かしさ、楽しさを最高の宝物と感じられました。
　天賞は獲得できませんでしたが、憧岳さんの句「行く秋や人生たった八十年」が、話題になっていました。「余りにもあっけない八十年」と解釈するのか、「どう生きても八十年のこと」と、解釈するのかが話題になっていました。

　兼題２では、晶如さんの句「縁側に爪切る日和鶏頭花」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。秋日和の昼間にパチン、パチンと爪を切っている穏やかさ、その庭には鶏頭花が咲いているのが見えます。この幸福感が、多くの選者の共感を呼びました。次に多佳さんの句「別珍といふ布ありき鶏頭花」が、天賞一つを獲得しました。きっと鶏頭の花から別珍を思い出されたのでしょう。しかも幼い時の懐かしい思い出と一緒に・・・。　教室もしばらくは、絹織物のベルベットに似せて、綿で加工した別珍という布についての会話が止まりませんでした。
　天賞は付きませんでしたが傘吉さんの句「鶏頭を愛でる笑顔の垣根越し」が、高得票を獲得しました。隣家のご主人と垣根越しに鶏頭についての笑顔の花談義が始まったのでしょう。読者の投票が集まりました。

　席題３では、栄女さんの句「秋刀魚焼く忍者づらした猫ひかえ」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。七輪で秋刀魚を焼いていた頃の情景が浮かんでくるとの天賞コメントがありましたが、猫が秋刀魚を狙っている楽しい一句になりました。「忍者づらした猫」とはよく言ったもの」との評もありました。次に傘吉さんの句「新走り愚痴も笑顔で聞き流す」も、天賞二つを獲得しました。美味なる新酒の前に愚痴などどこの世界の話、笑顔で聞き流して新酒を味わうことに集中している景が見えてきます。これもまた楽しい句になりました。次に多佳さんの句「切れ味の悪しき包丁秋の雨」が、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントには「まるで自分の暮らしぶりを覗かれたようだ」との評がありましたが、下五の「秋の雨」が、ぴったりの句でした。句も句評も入れて、私たちは素晴らしい句会を味わっていますね。

　新しい形の句会は、「自らが選句してきた句を句座の前で読み上げる」ことから始まるのですが、これは句会の始まる前に、「声をあげてどれだけ読んでいるか」が、問われる勉強です。言わば「予習がどれだけ出来ているか」ということにもなります。自分でやっ

てみて解るのですが、句の持っているリズム、詠み手の気持も伝わってきます。「声を出して句を詠むこと」の大切さです。

　来月は１１月、「立冬」を過ぎれば、俳句の季節は「冬」になります。１１月１１日が新橋ばるーんに集合しての句会となる予定です。正確には奥田さんから、またお知らせがあります。巷に渦巻く不快な事故、事件に負けることなく元気に暮らし、また新橋ばるーんに元気で集まりましょう。

白然記